

NPO法人 日本コンチネンス協会 (東京都千代田区)



排せつ時の介助方法を学ぶ講演会
参加者ら(11月24日、北九州市で)
—日本コンチネンス協会提供

すべての人が気持ちよく排せつできる社会づくりを目指し、排せつトラブルの予防、対応に関するセミナーや研修、排せつに悩む人を対象とした無料の電話相談などに取り組んできた。「コンチネンス」とは日常生活の中で排せつがトラブルとされている状態を意味する。1989年、当時排せつトラブルについて、現役会長が看護師の

排せつ時の悩み話しやすく

西村が「おまんこ勉強会」をはじめ、活動が広まり、2009年にNPO法人となった。全国支部に約30人の会員、病院や企業など約30の法人会員がある。排せつケアについて誰もが受講できる初級セミナーのほか、排せつケアの専門看護師のための研修など人材育成を担う。セミナーを受けた相談員による「排せつの悩み100番」も実施。1月にコンチネンス月間とし、失禁予防となる骨盤底筋体操の学習会や街中の排せつ相談会など、啓発活動にも力を入れてきた。

NPO法人 山友会 (東京都台東区)



簡易宿泊所を訪れ、住民の男性(右)と話をする山友会の相談員(11月23日、東京都台東区)

簡易宿泊所(ドヤ)が密集する東京・山谷地域(台東区、荒川西側)で40年間、生活困窮者や路上生活者のサポートを続けてきた。現在、ドヤに暮らす約3000人のうち7割が高齢者で、生活保護を受けている人が大半を占め、「日雇い労働者の街」として知られた山谷は急速に偏見の街へ変容しており、住民の孤立を防ぐ活動を重点を置いている。

山谷の住民孤立させない

設立は1984年。無料診療所「山友クリニック」を運営するほか、生活相談や地域の居場所作り、食事や住居の確保など、幅広い活動を展開している。事務所に日々、ドヤの住民が訪れ出し、交流する。最近では見えない人や体調を崩した人がいたら、相談員がドヤを訪れ、様子を見て回る。昨年やドヤの管理人を事務所に招いて意見交換する場も設けた。住民自身からの暮らしの悩みについて意識してもらいたい、との思いから、副代表の油井和徳さん(40)は「孤立しない街」を差し伸べられる街をつくってほしい。山谷の取り組みは、孤立する他の地域社会の解決策にもつながるはずだ」と語った。

認定NPO法人 つどい (滋賀県長浜市)



高齢者スタッフとともに、製造したばかりのせんべいを包装する川村さん(右)(11月1日、滋賀県長浜市)

16年、約30名の遊休農地の畑を花ハスで再生する「あいのたロータスプロジェクト」を企画した。親

収益化 高齢者にやりがい

「同じくもろろの高齢者が活躍する場をつくりたい」。そんな思いから、理事長の川村美津子さん(61)が2011年に団体を設立。介護支援施設を運営する例、耕作放棄地を活用したり、販売した菓子を継承したりして、やる気のある高齢者に仕事を提供している。16年、約30名の遊休農地の畑を花ハスで再生する「あいのたロータスプロジェクト」を企画した。親



読売福祉文化賞

創造的な活動 現場から発信

今の時代にふさわしい福祉活動を実現している団体や個人を顕彰する「読売福祉文化賞」の受賞団体が決まった。今年、2回目。一般部門では、劇場に行くとが困難な児童や障害児の病室などに出演し、音楽や文化芸術に直接触れられる活動を実施している「NPO法人心魂プロジェクト」(横浜市)など、高齢者福祉部門では、花ハスや園芸シヤケや農産物づくりを通して、高齢者に収益を上げさせる一方、多世代交流も盛んな「認定NPO法人つどい」(滋賀県長浜市)など3団体は選ばれた。読売新聞東京本社内、9日に表彰式が行われ、受賞団体に対して活動資金として100万円が贈られた。今の時代に合った創造的な活動を福祉の現場で発信する団体を紹介する。

- 【運営委員】(敬称略) 安藤雄太 東京ボランティア・市民活動センターアドバイザー 柳原小春 女徳 柳井孝子 シニア社会学会会長 高木壽司 和洋女子大学准教授 馬場 清 日本福祉文化学会会長 保高芳昭 読売新聞東京本社編集委員
- 主催 読売新聞社と読売の事業団 読売文化財団 読売厚生労働会 読売福祉文化学会
- 後援 読売新聞社 読売文化財団 読売厚生労働会 読売福祉文化学会

NPO法人 心魂プロジェクト (横浜市西区)



オンライン用スタジオで配信の撮影について語る寺田さん(右)と有永さん(11月19日、横浜市で)

外出困難な子に出前公演

1通の手紙で「来たくも来られない子どもたち」がいらぬことを知った。それがずっと頭を離れず、支援活動のために遠征を決意した。演劇仲間との協力を得て、照明・音響設備を持ち込み出前公演をスタート。コロナ禍で活動が制限される「新たなオンラインの生配信」を始め、子どもを見る側に終わらせず、双方との交流を重視する。ハンデと開きつ、フステアに立つキッズチームも結成した。宝塚歌劇団・劇団四季出身でも、一人の共同代表の有永美奈子さんは「自信を越えてそれ以外のハードルを越えてほしい」とエールを送る。今回の公演は「懸命に生きる子どもたち家族の方々と一緒にいたい」と喜ぶ。(横浜市・村尾希)

社会福祉法人 インクルふじ (静岡県富士市)



施設のリハビリで笑顔をみせる重症心身障害者の人たち(11月23日、静岡県富士市で)

重症心身障害児(者)の親たちが資金を出し合った。2004年、自身の生活介護事業所を立ち上げた。地域の需要に広げ、現在は生活介護事業所5施設とケアハウス2施設を運営し、ショートステイやヘルパー派遣にも取り組んでいる。20年間で1歳児が成人まで、約500人が利用した。我々が社会の中で普通の暮らしを。障害があるが

障害児の親 事業所設立

らと、自宅や山奥の施設に閉じ込められるおぼかし。「そんな思いが親たちを突き動かす。資金調達や制度の高い壁を乗り越えてきた。当初から役員を務めた小沢敏子さん(66)は語る。今も信の多くは利用者やボランティアの寄付と接点を持たせ、自由に受ける。一方で、たんの吸引など医療的ケアが必要な子どもたちのため、スタッフは常に緊張を強いられる。親たちの福祉の受け手から担い手へ」という挑戦と子どもたちの笑顔は、ドキュメンタリー映画「普通」に生きる自立をめざして(2011年)と、続編「普通」に死ぬをいのちの自立(20年)で紹介された。自主上映を中心に全国約500会場で、感動を呼んだ。(静岡県・関口雅也)

カンボジア自転車プロジェクト (大阪府貝塚市)



高橋先の中学生らと記念撮影する安田さん(右側) (カンボジアで) 自転車プロジェクト提供

通学用自転車 1700台贈る

ため15年に同国を訪れた。目にしたのは、貧しい家庭の中学生が毎日2、3時間かけて歩いて通学する姿だった。通学時間を家の農作業の手伝いに充てたいと、学校を辞める生徒もいた。「自転車があれば、教育を受け続けることができるのでは」と考えた。翌年から、現地をNGOと連携し、クラウドファンディングなどで資金を集め、自転車を購入し始めた。現地は道も狭く、故障しやすい。自分たちで修理できるように、寄贈した中学校に修理クラブも設けていた。来年で活動は10年目を迎える。安田さんは「何年も前に選んだ自転車を、今も大切に使用している子どももいる。カンボジアの全ての子どもにも自転車をプレゼントしたい」と語る。(大阪本社社会部・門間圭祐)